

## 製薬協特別番組 YTS山形テレビ 「みんなで学ぼう くすりのはなし やまがた元気でいかったね！」 公開録画を開催

### トピックス

秋の深まりを感じさせる2012年10月13日、山形市の山形ビッグウイング大会議場において、製薬協特別番組「みんなで学ぼう くすりのはなし やまがた元気でいかったね！」の公開録画を行いました。

当日は冷たい雨が降る中、280名を超える市民の方が参加し、地域医療における薬剤師の役割、医薬品の適正使用や、治験の重要性などを楽しく学ぶ機会となりました。

なお、当日の様子は11月3日にYTS山形テレビにて放送されました。

### くすりについてみんなで学ぼう

広報委員会コミュニケーション推進部会では、新薬の研究開発の重要性や医療用医薬品が果たしている社会的役割の重要性について、広く一般の方々に理解してもらうことを目指して、年に2～3回、テレビ局とタイアップして公開録画とテレビ放送を実施しています。今回は2012年10月13日に山形県山形市の山形ビッグウイング大会議場にて、「みんなで学ぼう くすりのはなし やまがた元気でいかったね！」の公開録画を行いました。

この公開録画には山形県出身で歌手の大泉逸郎さん、元女子バレー日本代表で現在は山形県に住む斎藤真由美さん、山形大学医学部整形外科の橋本淳一准教授、山形大学医学部附属病院薬剤部長／教授 山形県病院薬剤師会の白石正会長、そして製薬協からは藤井彰広報委員長が出席しました。

公開録画では、事前に撮影されたVTRを随所に織り込み、またクイズなど観客も参加できるコーナーもあり、楽しみながらくすりの適正使用や、新薬の研究開発の重要性などを学びました。

最初のVTRでは、山形県新庄市の例を取り上げ、地域医療における在宅患者さんに対する服薬指導の取り組みなどの紹介がありました。患者さんの適正使用やお薬手帳の存在の周知に大変役立っているということです。

また、山形県東根市にあるベーリンガーインゲルハイム製薬の山形工場にテレビカメラが入り、厳格な衛生管理、品質管理のもと医薬品が製造されていることなどの紹介がありました。

ゲストの大泉さんは、2011年の10月に脳梗塞で倒れ、くすりを服用していることもあり、くすりがこのように厳しい管理のもと、患者さんに届けられていることにあらためて安心したようでした。



収録風景



会場の様子



出演者の皆さん

## 治験は患者さんの理解が重要

藤井委員長からは、製薬企業は最先端の技術で高品質な医薬品を創り、世界の医療に貢献していること、新薬の開発力を持つ国は限られており、日本はアメリカとイギリスに次いで世界第3位の開発力を持っていることなどの紹介がありました。また、新しくすりができるまでの過程もわかりやすく説明し、基礎研究から非臨床試験、治験、さらに厚生労働省の審査を経てくすりが生産されるまでに9年から17年もの時間がかかることなどを説明すると、会場からは驚きの声が上がるとともに、くすりの開発の重要性について新たに認識してもらえたようでした。

その後、実際の治験現場の様子をVTRで紹介しました。山形大学医学部附属病院治験管理センターでの活動内容を紹介し、橋本先生、白石先生からも「治験は理解が得られたボランティアの患者さんがいて初めて成り立つこと、十分な説明の後に文書で同意してから始まり、いつでもやめられる」などの説明がありました。また、治験に参加する患者さんの相談に応じる『治験コーディネーター』の役割などにも触れました。治験は医療従事者・製薬企業と患者さんの二人三脚で進めていくことなどの理解が深まったようです。

## 治療満足度と薬剤の貢献度

新薬ができることによって、それまで治療方法のなかった多くの病気が治療可能になりましたが、まだ治療満足度が十分でない疾患がたくさんあること、たとえばアルツハイマー病など根本治療が難しい疾患などの満足度が低くなっていることを「治療満足度と薬剤の貢献度の相関図」で示しました。この説明をした藤井委員長は、「満足度の低い疾患に対する革新的な新薬を一日でも早く患者さんに届けるのが私た

ち製薬会社の責務である」と力強くコメントしました。

橋本先生は、専門の骨粗しょう症について、「骨吸収抑制剤など新薬の開発により、この疾患の治療満足度がここ数年で大きく上がってきた」と紹介しました。参加者は実際の治療現場のVTRを見て、その進歩を実感していました。

ゲストの斎藤真由美さんは、「スポーツ選手だったので骨には関心が高いこと」、「母親が骨粗しょう症の予防のためウォーキングをしていること」、「その母親にいくすりでも治療効果が上がっていること」などを話したいと目を輝かせていました。

## より理解していただくために

藤井委員長は、「新薬を創る重要性や医薬品産業をもっと理解してもらうことがとても重要であり、そのために製薬協は研究開発や治験のキャンペーンを展開したり、小学生、中学生向けの『くすり研究所』といったウェブサイトなど、さまざまな機会を通じて広報しています。また、製薬会社だけではなく、医師、薬剤師、看護師、患者さんなど多くの人たちが一緒になってくすりを創る時代になっていること、そういうことを広く知ってもらうために、ウェブサイトなどを通じて今後も多くの情報を発信していきたい」とコメントしました。

最後に出演者それぞれが感想を述べましたが、画期的な新薬の登場を望む声が多く聞かれました。また、藤井委員長は、「新薬は、有効な治療法がなかった病気とたたかう患者さんたちに大きな希望を与えてきました。これからも必要としている患者さんにすみやかにくすりを提供して、健康と福祉に貢献していくことが私たちの使命であると考えています」と締めくくりました。

(広報委員会 コミュニケーション推進部会  
喜多 英人)